

IV パネルディスカッション

テーマ『ものづくり教育の充実と技能・技術教育の改革』

- ・コーディネータ
矢野裕俊 様 (大阪市立大学教育センター教授)
- ・パネリスト
南齋征夫 様 (大阪市立大学名誉教授)
青木豊彦 様 (東大阪市ものづくり親善大使・(株)アオキ代表取締役社長)
櫻井和雄 様 (神戸村野工業高等学校長)
横内 環 様 (大阪府中学校技術家庭科研究会長)



パネルディスカッション

(敬称略)

○矢野

今日のテーマは『ものづくり教育の充実と技能・技術教育の改革』です。これからの改革の方向について、パネリストの皆様からそれぞれご意見をいただきたいと思えます。

○南齋

今、工業高校はいろいろな問題を抱えていると言われます。工業高校は、これからどうすれば良いのか？との問題提起がなされました。工業高校の先生が中心となって、大学の技術系学部や教育系学部の先生方が集まって、一つの研究グループを作りました。そこでこれからの日本の技能・技術教育はどうあるべきなのか？というテーマで総合的に研究することとなりました。幸い、文部科学省から科学研究費が助成され、10カ国以上に渡り海外の技能・技術教育

の調査をかなり広範囲に実施しました。

我々がまず目的としたのが、工業高校を中心として考えようとした。また工業高校を卒業していく優秀な生徒たちを、更に教育できる機関が日本には存在しない。大学は研究センターであります。

また別の観点からは、工業高校へ入学する前の段階として望まれる教育がなされているのかどうかについていろいろ調べてみたところ、現在の初等中等教育の段階で、技術教育に関わる科目が非常に心細い状況であることがわかりました。

私たちが研究を通じて得た結論には、第一に工業高校へ入学する以前の段階、第二に工業高校を卒業した生徒を更に技能・技術教育を進める教育機関の問題を、大きな二つの柱としてまとめたところです。

一つは、工業高校へ入るまでの初等中等教育の段階で、ものづくりや技術リテラシーについて、どの程度の教育がなされているかを調査しました。東京都では、一つの小学校に必ず一人の図工の先生がいる。違う府県では、図工の先生が学校にいない状況も見られ、非常に心細く感じました。これでは、子どもが自ら手を動かしてもものづくりをしたくても教えてもらうことができない。こうした子どもたちが、中学校へ進学しても進学が重視されている状況では、ものづくりに関する授業が軽視されがちであります。こうした経過を経て、高校や工業高校へ進学してきたときに、我々が求める技術的素養のほとんどが身につけられていない状況であることがわかりました。

知識に偏った教育を受けていたのでは、

子どもたちの才能は知識だけでなく、いろいろなものづくりに才能を発揮する子どもたちもたくさんおります。こうした子どもたちの期待に応えようとするならば、初等中等教育の中で、小学校・中学校・高校までを一貫する教科としての『技術』教育を行わなければならない。これを全体の教育プログラムの一つの柱として、新しい教育体系を作り上げていく必要があるように思われると、提案・報告をいたしました。

そういう形で提案すると、これまでは『技術』についてあまりその才能を意識しなかった生徒も、技術リテラシーやものづくりの科目が増えることによって、自身の技術の才能を意識し目覚める機会も増えるだろうと思います。

二つ目は、工業高校を卒業した後の問題についてです。現在は、技能・技術教育について専門的に教える教員が非常に少ない。これからの世界での技術競争を考えると、日本国として工業高校を卒業した子どもたちのために、技能・技術教育に特化した教育機関で更に勉学を重ねる機会を与えたいと考えています。

我々は、この技能・技術教育に特化した高等教育機関を『技術専科大学』と仮に呼び、我が国の数カ所にモデル校を設置し、技能・技術の腕を更に磨きたいという考える生徒の期待や声に応えようと、報告書に提案したところです。

○青木

私は企業人として、ものづくりをやっている会社の男として話をさせてもらいに来ました。私は今日、胸躍る気持ちでこちらへ参りました。なぜかという、僕は昭和20年生まれなんです、僕らが中学生のときには工業高校は一種の憧れの的でした。淀工（淀川工業高校）に入りたい！！今工（今宮工業高校）に入りたい！！そう思っていました。たまたま東大阪で人工衛星を創るんや！となりまして、大学や高校を廻ってみましたら、あまりにも先生に元気がない！！そんな印象を受けました。先日、淀川工業高校を訪れて、長谷川校長に学校を見せてもらいました。そしたら、ちゃんと（実習作業）してるやん！！生徒、ようやとるやん！！と思った訳です。今、世間で言うほどまでのことでもないな、と感じた訳です。ただ、子どもたちが志を持て

るような学校にせなアカンのとちやいますか？

最近も新聞で、「今、新幹線が走る時代に蒸気機関車の部品を作って、『これが技術や技術や』言うてる」と、キツイこと書かれてました。その蒸気機関車の部品を作って最新の技術やと言うのは、『技術』ではなく『匠』やろと言われました。だけど、東大阪にはオンリーワンの会社が200社あります。これも競争なんです。切磋琢磨してるんです。ここに来てはる皆さんが競争したら、みんな変わると言うんです。どうでしょ？

先ほど、ちょっと嬉しい話を聞きました。青木さんのところで働きたいという生徒がいてるということで、見学に来てもらいました。実際に来たら大学生よりもしっかりしてる！！「以前に青木さんの話を聞く機会があって、それで『ものづくり』がしたいと思って、3年間、工業高校で機械の勉強してきた」と言う。とっても嬉しかったんですが、この生徒にはいっぺんいろんな会社を見て来てから、うちの会社を判断して欲しいということにしたんです。先生方も、もっともっと敷居を下げて、どんどん町工場も覗いてもらいたいと思うんです。町工場にも優秀な会社があるんです。学校だけの教育では、ちょっと物足りんのではないか、と思うんです。

○横内

私が勤めだした頃の技術家庭科と、今現在の技術家庭科では状況が大きく変わっておりまして、最も変わったのは実施時間数が大幅に減っているということです。20年ぐらい前ですと、1年生で技術2時間・家庭2時間、2年でも同じ、3年になると3時間ずつ、選択科目まで含めると技術だけで4時間、技術と家庭科を合わせて6時間あったんです。それが現在では、1年生で技術・家庭科あわせて2時間、2年も同じ、3年になると技術と家庭科をあわせて1時間しか授業時間が取れない。このような様子から見ても、技術科と家庭科の分野が大きく後退してしまっています。中学校の平均持ち時間はおおよそ20時間ありますので、技術科や家庭科の先生は、持ち授業数の大半を総合的な学習の時間など、本来の専門教科とは違う科目を教えています。更にひどいのは、クラス数で教員数

が決まりますので7.5時間程度になってしまうと、情報科・技術科・家庭科の専門の先生が存在しにくい状況になります。この状況は、市によって対応が違っており、大阪市であれば専門の講師の先生を雇い入れ対応しております。他の市では、他教科の先生が技術科を教えるような状況も生まれています。吹田市には中学校が18校ありますが、全ての科目の先生が揃っていない学校は4校もあります。こうした状況の中で、技術家庭科の状況は厳しいものがございます。

また中身も変わってきました。昔でしたら、木材加工・金属加工・機械加工・電気・栽培の分野がありました。木材でしたら本立てづくり、金属でしたら文鎮づくり、機械でしたらエンジン分解、電気でしたらラジオ製作などをやっていましたが、現在は、こうした内容ができなくなってしまっています。本来、『技術・家庭科』は手を使って脳を活性化させて考え、また手に戻して作業することをサイクルすることで創造的なものづくりの考え方を養っていく教科なのですが、現在はそうできていません。

また最近の子どもには三つの特徴があると思っています。一つ目は、リアリティー喪失というような、短絡的な抽象的な世界に入ってしまうと、実存感がない生徒が増えています。二つ目はHow to 的な授業に偏ってしまっている。型や手順からはみ出ることができない。最後は、Heart important といふべきか、全部の質が一緒になってしまっています。最近の子どもたちの特徴は、教育課程の中では実体験が乏しくなってしまう教科が増えてしまうことによって、ますますこのような子どもたちが増えてしまうのではないかと懸念しております。

技術家庭科について、最近では高等学校との連携がいろんな形で試みられています。たとえばロボットコンテストですと、中学校だけでは人材もスタッフもいませんので高等学校の先生と協力しながら実施することも考えられます。高等学校と小中学校が連携を模索することで、高等学校の技術を小中学校の子どもたちにも伝えることも必要なのではないかと考えています。

○櫻井

科研費研究もさせていただいた訳です

が、その中で、ものづくり教育は日本で非常によく行われていると文科省の報告も読ませていただきました。私の実感としては、ものづくり教育を本当にしっかりできているのか、まず疑問を持っております。日本の戦後復興を遂げたのは、工業高校の卒業生が大きな役割を果たしたことは皆さんご承知いただいていると思うんですが、実は伝統ある工業高校の昭和34年のカリキュラムを調べますと、専門の単位数が56単位ありました。そのうち、必修で実技を伴う科目が25単位。平成6年になりますと合計で47単位に減り、実技を伴う科目を見れば25単位から18単位に減っている。平成17年になりますと実技を伴う科目が、3年間で15単位にまで減っているんです。

これは機械科のカリキュラムを調べた訳ですが、合計の最低で29単位、最高でも41単位です。平成6年から比べても最高で6単位も減っているんです。この29単位というのは大学進学へ対応する形で組まれているものなのですが、昭和34年の工業高校は、青木社長も言われましたように各中学校の成績上位の生徒でないと入れない学校だったんです。兵庫県も大阪府も教育改革の一環で、くくり募集を取り入れる学校が増えております。

入学後1年間は、いろんな学科の授業内容を体験してから学科選択をするようになってきておりまして、システム的に工業教育の質の低下が問題になってきております。私が勤めておりました学校で工業高校への進学の動機について調べた結果なんです、本当に工業が好きで来たのは3割、どちらかと言えば工業が好きで来たのが4割、行ける学校だからとの回答が3割以上存在することがわかりました。こうした生徒にも、きっちり工業について教えないといけない訳で、かなりのエネルギーを費やしております。

もう一つは、企業の側から見ると、企業の人事担当者が言うには『やる気』と『元気』があればそれで良い。必要な技術教育は会社でしますので、工業高校に技術教育は期待していません」と平然と言われます。これも工業高校の一つの実態を表す例なんです。こうした実態をどうにかしなければいけない、と考えております。北九州のある中小企業が、工業高校の卒業生を採用し

まして、『仕事マスター期待票』を作っているそうです。入社後、3ヶ月、半年、1年とそれぞれに目標が記されており、なんと10年先まで細かく期待票に記されています。このようにして社員教育を通じてレベルアップしていくようにしているんです。一般に国の調査では、高度熟練技能者になるまでには平均で16年かかると言われています。ものづくりの人材を育成するのに、これほど長期間の時間がかかるのにも関わらず、工業高校と大学とのプログラムが接続されていない。大学は工業高校に推薦枠を設けてはくれませんが、入学後のカリキュラムは普通科から来た学生のカリキュラムに工業高校の卒業生が乗っかっているだけです。工業高校は専門教育を行うので、数学や英語の授業時数が少ない。そのため大学では補習を行うようになってきました。でも補習ですから単位認定はされません。工業高校で学んだ専門の単位については、大学では認めてくれません。大学は工業高校出身者の評価はしていただけます。実験実習では工業高校出身者がリーダーシップを発揮し活気ある実験実習となるそうです。工業高校で既に学んだことと同じことをまた大学で再度行うにもかかわらず、プログラムが接続されていないんです。工業高校でのプログラムと企業での人材育成プログラムの接続も、現状ではあまり期待できません。我々工業高校で働くものは、企業の人材育成プログラムの内容がわからない。また企業も、工業高校は何を学ばせているのかがわからない。人材育成に長期の時間が必要なのであれば、国として工業高校から学んだ内容から大学や企業の人材育成プログラムとの接続を考えなければならぬ。最近、厚生労働省が技能検定の受験資格を緩和し、工業高校の在校生でも3級技能士の受験資格が得られ、3級技能士を取得すると2級技能士の受験資格も与えていただけるようになりました。昨年、全国で工業高校現役生徒25名が普通旋盤の2級技能士に合格しています。フライス盤1名、電子機器組立6名、とび作業4名が合格しています。しかしこれは、高度熟練技能者を学校に迎え入れるか、生徒を企業に送り企業に指導していただかないと実現できないんです。現在の工業高校の教師は残念ながら、基礎的な指導はできても技能レベルを高めた授業ができる人がいない。

福岡県では、高校生ものづくり技能育成事業を立ち上げ、工業高校教員に技能士2級を取得するよう援助を行い、17年度で工業高校教員の48名が受検し70%以上の合格者を輩出したそうです。兵庫県でも今年から匠の技探求事業で、高度熟練技能者を全日制の工業高校へ配置する取り組みが始まったところですが、しかしこれは課外活動としての取り組みであって、授業の中では技能検定3級レベルに至るような授業のシステムができあがっておらず、大きな課題であると考えています。プログラムの接続を考えた技術専科大学を必ず作る必要があることと、企業と連携して長いスパンでの技能を高める実践的なプログラムの接続をしていく必要があると考えています。

○南 齋

さきほど櫻井先生のお話の中に、工業高校に来る3割の生徒が工業なんてどうでもいい、と感じているそうですが、今回の研究の過程で一つは初等中等教育の段階で生徒の感性や感受性を高めたりする教育が貧弱になってきていると思うんです。歴史的に振り返ると、日本は欧米に比べると、決定的に違う点があります。ひとりひとりの子どもの将来を支える学校教育という発想が、戦前にはなく富国強兵政策で国が中心の考え方でした。一方、戦後になると戦争で疲弊した国を立て直すために欧米に追いつき追い越せといった考え方で、ひとりひとりの生徒個人ではなく国を前面に意識して頑張ってきました。最近では、世界のレベルあるいは世界レベルよりも突出した領域も登場し、グローバル化の中で世界競争に勝ち抜かなければならなくなりました。これも国というイメージが非常に大きくなるようになりました。教育というのは、ひとりひとりの子どもの将来を考えて進めなければならないと思います。現在、話題に上っている教育基本法にしても、ひとりひとりの子どもが将来自立していけるように解釈できる部分がない。日本のこれまでは、ひとりひとりの子どもの視点を意識した教育に乏しかったと思います。さきほどの3割の工業なんてどうでもいい、という子どもが工業高校に入ってきたときに、小中学校時代にもものづくりの経験がほとんどないんです。そんな彼らに工業高校がものづくりの楽しさを見い出させるよう

な教育をする必要があると思うんです。工業高校で、良くできる生徒は大事にされると思うんですが、工業高校に入ってきている生徒の大半は小中学校でものづくりの楽しさをほとんど知らないままに入ってきていると思うんですが、こうした生徒も本当に大事にされているんでしょうか？

○青木

まず、ものづくりで働いている人の給料が安すぎると思うんです。もっと給料が上がるようにせなアカンなあと実感しています。今、ここに経済産業省から足立さんが来ておられますが、経産省の役人で理系出身の人がかなり少ない。こんなんで国がものづくり云々言うてもいけるんかな、と思うんです。パターンが決まっていて、科学ジャーナリスト大賞を取った本村さんと偶然に会いまして、我々ものづくりをやっているものは、3Kとも言われるけども、やっぱり自信を示さなアカンと思ってます。

和歌山の島精機さんは、工業高校卒業の社員に商品開発をさせ、大学卒業の社員に現場を任せて世界の島精機になっていきました。アイデアが湧いてくるのは高卒で、大卒は頭の中ががんじがらめになっておって商品開発に向いてないと聞いたことがあります。工業高校はものづくりに元気な子をつくって欲しい。元気な子をつくってくれたら我々が一人前に育てるよう頑張りたい！！人間って12歳から25歳までが人間の感性が磨かれると思うんですけど、そんな大事なときにしょうもない勉強ばかりせんとって欲しいんです。

そんなことよりも実体験をして欲しい！！これが必要やと思うんですけど、図工や技術家庭科とかの実体験する時間がかなり少なくなってきたらしいけど、これで大丈夫なんかなと思います。

○矢野

南齋先生からの問いかけがありましたが、良くできる生徒に目が行きがちですが、むしろ、工業高校に入ってきたくて入学したのではない子どもたちにこそ、ものづくりの楽しさを、との話がございました。この点について少し議論したいと思います。

○櫻井

さきほど実習の時間数が減ったとのお話

もありましたが、これだけでなく昭和60年前後からコンピュータが学校現場に導入され始め、工業教育の近代化については国も県も予算をつけてくれたんです。新しい装置やシステムを入れたのは良いんですが、それまでの普通旋盤の授業時数を削ってNCの時間に割り当てたり、値段の高いNCフライスを導入しても時間数が短いために真鍮板にエンドミルで文字を掘り描くくらいしかできないんですね。

松下電工の奥嶋さんと議論したんですが、今は単能工より多能工が求められているとのこと。多能工とは、旋盤も、フライスも、仕上げもできることではなく、機械の技術を学びながら電気技術もできるようなことを言うそうです。幅広く浅く教えることを、どこかで吹っ切らないと、旋盤やフライス、溶接などのコアとなる実習を中心的に教えつつ、更にその周辺について学び、就職後は更にその範囲を広げる。生徒にそうして16年間のスパンで仕事マスター期待票のようなものを工業高校と企業で連携すれば、できると思うんです。こうしたルートに乗った生徒については、これにつながるプログラムで企業に対応してもらえれば良いんです。幅広く浅く教えるのではなく、一つの技能をしっかりと教えることが、これからのキーワードとして工業高校の改編をしていかなければならないな、と考えています。そうすると、ものづくりに意欲も興味もなかった生徒が、なにかできるようになるとそれが自信につながると思います。

○横内

技術家庭科の目標として、技術分野の目標なんですが、生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を通じて、生活と技術の関わりについて工夫し創造する能力と実践的な態度を育てるという、学習指導要領の目標に明示されています。また、総合的な学習の時間ではややもすると、近くの商店街で社会体験すれば終わりのような雰囲気、地域を這いずり回るような授業になってしまっている部分もあります。総合的な学習の時間の目標には、自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察、実験、発表、討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習・問題解決的な学習を積極的に取り入れることに留意するよう記されています。

いわゆる義務教育の中でも、総合的な学習の時間の中で技術家庭科の時間も果たせるような道を考えることも大切ではないかと、考えています。

もう一つは、現在ではコンピュータが大変なブームになっています。ただ単に画面上だけでの操作に終わる訳でなく、人と人のつながりを大切にするインターフェース、五感がコンピュータの中でどう表現されるか、というようなプログラムが必要ではないかと考えます。こうした中で、ロボットをつくるということは、人とのコミュニケーションを通じて作りますし、コンピュータでただプログラムを入力しただけではロボットは動かない、つまりリアリティーが入ってくるような教材の在り方が大事ではないかと考えています。

○会場

今、若者自立戦略プラン等で、各省庁が現状打破のための素晴らしい新たな取り組みを進めておりますけれども、やっぱり対症療法ではないかなと私は思います。小学生からの技術リテラシーの育成や、技術専科大学の設置も考えていただきたい。そのために、工業高校からの接続を工夫したコースや大学の設置、更に既存の大学も変更するような骨太な施策を進めていただきたい、と思っております。よろしく願いいたします。

○会場

私は元教員で、現在は二つの会社の取締役をしております。一つは360人ばかりの会社。こちらはものづくりはしておりません。もう一つは、40人くらいの小さな会社ですが、急速に業績が伸びてきておるのですが、ほとんどの社員が工業高校卒なんです。取締役としていろいろ提案してみらるんですが、大卒社員が多くいる360人の会社では意見を吸い上げてくれない。40人の会社では、どんどん実現され、皆が生き生きしているんです。先ほどの青木社長のお話を聞いて感じたんですが、文科省はあまりにも問題・課題を挙げすぎのような気がします。ものづくりに時間を取れないのではなくて、ものづくりに時間を割かなければならないと思います。思い切った取捨選択も考えていただけないでしょうか。

○会場

私の学校では、生徒が平日に企業に行って技能を教えてもらいます。そこで最後に発表会があるんですが、旋盤やハンダづけ作業などの体験を通して学んだ感想は、技能を習得した喜びを語るのではなく、『ものづくりは人づくり』だと言うことがわかったと言うんです。そこで普通科の生徒が、コンピュータやロボットの時代に今更なぜそんな勉強をするの？と聞きました。生徒は困りまして、企業の名工の方が君たちが考えたロボットやコンピュータを具体的に形にするのが工業高校の技術なんだよ、と言っていたきました。今の社会は、大半がこの普通科の高校生と同じような考え方になってしまっているように感じます。

○会場

櫻井先生がおっしゃいました、広く浅くではなく、深く深くなんだとのことでしたが、一流のものを若いときに見せることがどの分野でも大切であると感じた次第です。これから団塊の世代の皆様が大量に退職されます。こうした方を、ものづくり博士として人材バンクに登録して、工業高校等に行ってもらおうと文科省と協力して作業を進めておるところです。どうぞ遠慮無く、国を使っていただけたらと思います。

○青木

ものづくりを極めた学校を作りませんか？10～20人など人数を限定して、国が無料で行って、ものづくり大賞にあるようにマイスター制度のようなものをつくってみたらどうでしょう。職人の卵を大事にビシビシ育てる学校を作りたいんです！！私らは鉄の料理人やと思ってるんです。若い子に難しい言葉はいらんのです。この学校出たらものづくりの名コックになるんや、というような学校が欲しいんです。

○矢野

最後に、パネラーの皆さんから総括的なご意見、ご提案や補足など、一言ずつお願いしたいと思います。

○南齋

報告書にも述べたことですが、我々は工業高校の前の段階で初等中等教育が行われ

ておりますが、現在の初等中等教育には随分な偏りがあります。いわゆる受験に向かって教育するような形になってしまっています。ものづくりを系統的なカリキュラムとして取り入れて、子どもたちひとりひとりの感性とか感受性に訴えかけ、子どもたちの生活そのものを豊かにしようという観念に欠けているのではないかと思います。ぜひとも、そういう教育プログラムを実現できればと考えています。

○青木

実際に各地を廻ってみると、地元の産業に密着した工業学校が意外に少ないんですね。学校自体がみんな金太郎飴みたいになってるんじゃないかな、と感じます。私の工場では飛行機の部品も作ってるんですが、モントリオールの航空機メーカーでは、その地域にメーカーの学校があり、実際の飛行機の内装をつくってるんですね。こんな感じで地域と密着した産業を伸ばすような学校がでけへんのかなぁと思います。政府にこんな学校を作って欲しいんですけど、そしたらなんかオモロイことができると思います。

○櫻井

先ほど、金太郎飴という話が出ましたが、どこの学校でも機械科であればどこの学校でもカリキュラムはほぼ同じで、実習内容もほぼ一緒だと思います。一つの技術をしっかり学ぶことが大事という話もありました。次はそれを広げていくことが大切だと思うんです。しかし、環境教育やキャリア教育など、総合的にはつながりが難しいため学校現場はアレもコレも教えなくてはならない、という状況になっています。どこかで総合的に筋をきちっと通した形で教育の在り方を考えないといけないと感じています。

それから理数離れが叫ばれますが、日本は科学リテラシーや数学リテラシーが弱いと言われます。理科教育学会や数学教育学会が、また工業の学会が、それぞれの立場でしかモノを言っていない。やはりこれでは総合的な視点が欠けてしまいます。私たちも広く総合的な視野で活動できるよう努力したいと思います。

○横内

私は小さい頃から、父親に『手に職をつけろ』と言われてきました。生徒には、リアリティーにもものをつくるのが大切だし素晴らしいことだと伝えなければなりません。それから入試制度の問題があり、入試問題で技術科の問題が出題されるとまた生徒や保護者の見方も変わってくると思います。そして子どもたちが一つのを一生懸命に作る姿って本当に素晴らしいんです。いろんな生徒が、それぞれの考えにたって作っているんです。こうした生徒の姿からも、ものづくりの本当の良さを改めて感じることができます。

○矢野

本日はパネラーの皆さん、会場のみなさんから貴重な意見の数々が出て参りました。一つは、連携・接続の問題ですが、授業時数が少ないことをただ嘆くのではなく、中高や高大あるいは教科間の連携も必要であること。また接続の問題ですが、学校間のカリキュラムや工業高校で学んだ生徒たちがものづくりへの関心を大学で更に深め、また工業高校の教育プログラムを企業の人材育成プログラムにリンクさせていく必要性も重要な問題提起であったように思います。学校は広く浅く、少しずつ教えていくことに拘るのではなく、一つの技能をしっかりと学ばせることで、必要に応じて関連する分野や範囲に視野を広げ生徒も教師も自学し、学んでいくように考えなければならぬと思います。

青木社長からは、地域の産業と密着した学校をつくらうという、具体的な提案がなされました。会場の先生からも、子どもたちに夢を語りたいというお話もありました。新しい学校をつくることだけでなく、今の学校の中ででも、ちょっとした視点や考え方を変えてみることで、何かできるのではないかと感じた次第です。今回のパネルディスカッションは、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。